

イギリス文学評論

I

Critical Studies
in
English Literature

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編

内田能嗣

イギリス文学評論

I

Critical Studies

内多 毅 監修

杉本龍太郎 編

内田能嗣



創元社

〔執筆者紹介〕

内 多 毅	東海大学名誉教授，文学博士
社 本 時 子	松蔭女子学院大学教授
尾 崎 寄 春	奈良女子大学教授
岸 本 吉 孝	梅花女子大学教授
吉 村 伸 夫	夙川学院短期大学専任講師
大 日 向 幻	関西学院大学助教授
蜂 谷 昭 雄	甲南女子大学教授
杉本龍太郎	大阪女子大学教授
仙葉 豊	大阪大学助教授
三ッ星堅三	松蔭女子学院大学教授
内 田 能 嗣	帝塚山学院大学教授
瀧 勝 也	大阪成蹊女子短期大学教授
玉 井 暲	大阪大学助教授
筒 井 均	和歌山大学教授
上 山 泰	関西大学教授

イギリス文学評論 I

昭和61年4月10日 第1版第1刷発行

検 印
省 略

監修者 内 多 毅
編 者 杉 本 龍 太 郎
内 田 能 嗣
発行者 矢 部 文 治

印刷所 株式会社 太 洋 社

発 行 所

株式 創 元 社
会 社

大阪市北区西天満1丁目4-2 郵便番号[530]
電 話(06) (363) 2531(代) 振替大阪57099
東京支店 東京都新宿区山吹町77 郵便番号[162]
電 話 東 京 (03) (269) 1 0 5 1

©1986

ISBN4-422-81031-6

Printed in Japan

目 次

序論	内多 毅	3
----------	------	---

詩の部

第1章 『フォースタス博士の悲劇』	社本 時子	9
——アイロニーの世界——		

第2章 シェイクスピア：『アントニーとクレオパトラ』……	尾崎 寄春	22
------------------------------	-------	----

第3章 「聖金曜 1613 年 西方へ馬を駆りつつ」	岸本 吉孝	36
——ダンの裏の意味——		

第4章 マーヴェルの変貌	吉村 伸夫	49
--------------------	-------	----

第5章 叙事詩の詩脈	大日向 幻	65
—『失樂園』における迂回効果—		

第6章 シェリーの「エウガネイ連山」の構造	蜂谷 昭雄	77
-----------------------------	-------	----

第7章 ベルソナの老いへの加速	杉本龍太郎	87
—T.S.エリオットの初期の詩をめぐって—		

小説の部

第1章 デフォーの海賊たち	仙葉 豊	103
——Avery・Singleton・Misson——		

第2章 『クリスマス・キャロル』の意義	三ッ星堅三	115
---------------------------	-------	-----

第3章 「とばりの彼方」における幻影	内田 能嗣	128
第4章 『帰郷』——エグドンの自然と愛憎——	瀧 勝也	139
第5章 『ドリアン・グレイの肖像』における図柄	玉井 暲	151
第6章 音, 沈黙, そして言葉	筒井 均	166
——『インドへの道』第3部——		
第7章 『恋する女たち』	上山 泰	178
——愛情と結婚について——		
あとがき	杉本龍太郎	193

イギリス文学評論 I

序 論

サルトルは1966年秋、日本を訪れ約1カ月間滞在する間に、東京で2回、京都で1回講演をした。京都での講演は「作家の政治参加」という題名であった。サルトルはこの講演で何を訴えようとしたのであったか。作家が政治参加をするためには、最も基本的な姿勢として、専門語ではなく、共通語を使用することによって、人生に価値ある普遍的なるものを伝えていかななくてはならないということであった。

今日の文学批評は、20世紀の言語学がそうであるように、つぎつぎに新しい専門的術語が生み出されてきて、一般の人々には到底理解しがたいものとなっている。専門的術語というものが、それに対応する実体をもっている時は難解なものとはならないのであるが、人間の経験をともなわない抽象的な別世界のなかで造語されたものとなると、それは極めて理解しがたいものとなってくる。文学は数学ではない。文学世界は人間の経験と魂の世界であるから、文学を数学システムの中に移動させて、数学システム間の関係を規定するかのような、術語を造語したところで、文学を説明することにはならない。サルトルの言う「共通語」というのは、人間の経験と魂とから切断されなくて、人間であるならばすべての人に理解可能な言語ということであったのであろう。

今日の科学＝技術文明が優位を占める時代において、科学の影響力が文学に及んでくることは避け難いことであるかも知れない。20世紀の前半においては、なじみのなかった人文科学、社会科学、自然科学という三分法が、20世紀の後半から一般に使用されるようになってきた。この場合の「〇〇科学」の「科学」は‘science’のことであろう。「自然科学」を‘natural science’と呼ぶようになったのは19世紀になってからのことであろう。17世紀から18世紀にかけては‘Natural Philosophy’という言葉を使用していた。‘philosophy’から‘science’への移行は、やがて今日の科学＝技術文明の抬頭と平行的な現象であったと解することができるであろう。

朝永振一郎博士は「物理学の原^{オリジナル}罪」^{・シン}ということを言われた。それは物理学は、研究を部分から始めるから全体を見逃すことを免れることができないとい

う限界を超えることができないことを指摘されたのである。今日の物理学は、ニュートンのような‘Natural Philosophy’ではなくて、‘natural science’になってしまったということを言っておられるのであろう。物理学といわず、すべての自然科学は19世紀以来細分化することによってその研究成果をあげてきたことは否めない。人文科学が自然科学の発展に添うことができない跛行情况が、人文科学への非難としてしばしば言われつづけてきた。こういう状況になると、朝永博士の自己反省としての「物理学の原罪」のことは考慮の外において、文学の研究も細分化し、一見研究業績をあげたかのような装いをととのえようとする傾向が生じてきた。こうした傾向は、20世紀においても、あらゆることで「世界一」を目ざしたアメリカが文学の研究においては、当時高い‘scholarship’を示していたと受けとられていたドイツの文学研究方法を取り入れるために、Johns Hopkins University を創設したり、‘MLA’ (‘Modern Language Association of America’) を創設し、機関誌の *PMLA* を刊行することになった。こういう研究の方向づけは、やがてアメリカの大学における Ph. D. の学位が、細分化されたテーマを深く追求するものとなるという結果を生み出してきた。太平洋戦争後、日本の新進気鋭の学者たちは競ってアメリカの大学に留学し、Ph. D. 的研究方法を身につけて帰国し、日本の大学の教壇に立つことになった。英文学の研究も急速な細分化、専門化が推しすすめられていった。戦前の、東京大学のブランデン教授や、京都大学のクラーク教授のような、イギリスの Oxbridge の学風とは全く異なるものへと様が変わりをしていった。「日本英文学会」への帰属意識よりか、「ハーディ協会」「V. ウルフ研究会」への帰属意識が強くなり、文学の批評も、一見、精緻さを加えるかに見えた。こうした科学からの影響力が果して文学理解にとって「功」であったか「罪」であったかは深く考えてみなくてはならないことであろう。

今日の文学批評がおちこんでいるもう一つの誤りは、19世紀末の「芸術のための芸術」の呪文から、いまだに完全に脱出していないということである。文学は言語による芸術であって、すべて美的判断によらねばならないとして、自らを「閉じた世界」に幽閉してしまったことである。これは退廃であったのである。しかしこの19世紀末の退廃は20世紀にはいっても容易に改まることなく、かえってアメリカの‘New Criticism’に受けつがれて、さらにアメリカに地歩を築き、イギリス、日本にも影響を及ぼしてくるようになった。ここでは‘texture’とか‘structure’とかの術語が登場することになった。1960年代から1970年代にかけてフランスの R. パルトを中心とする‘テクスト’理論もこの流れに

において理解できるのであるが、ここにおいても、‘lecteur’ とか ‘écriture’ とかいう術語に特殊の意味がもたされるようになり、文学批評が難解となり、さらに1980年代ではJ. デリダの ‘deconstruction’ 理論が登場してますます難解なものとなっていった。人間も動物や植物と同じように、独立した不変な「モノ」としてあるのではない。自然のなかで諸関係のもとに生きるという営みー「コト」を営む限り動植物も人間も存在を続けることができる。動物学ではなくて動生物学が、また植物学ではなくて植生物学が追求されなくてはならないように、人物をあれこれとあげつらうのではなくて、諸関係のなかに生活を営みコトを追求する人生学が追求されなくてはならないのである。部分化し、抽象化していくことは、「モノ」化することで、「コト」の営みの側面に目をおおうことになり、これは基本的に退廃と言うほかないであろう。

20世紀ヨーロッパ、アメリカを席卷した ‘Modernism’ ‘Postmodernism’ の芸術運動、文学運動は、ロシア、ドイツ、フランス、アメリカには大きな影響を及ぼしたけれども、イギリスには、とりたてて言うべき影響を及ぼさなかった。イギリスでは、新しい「専門用語」の使用なしに文学のことが話し合える状況に20世紀もあるように思われる。

Irvin Stock は *Fiction as Wisdom. From Goethe to Bellow* (The Pennsylvania State University, 1980) で、“Poetry begins in pleasure and ends in wisdom” という Frost の言葉を引用してそれに同意を示している (p.3)。Stock は文学は「美」とか「思想」とかにかかわるものではなくて ‘humanity’ にかかわるものだということを強調するのである (p.4)。

イギリスの文学は ‘humanity’ が豊かな文学である。人の意表に出る新しい思想を駆使することもない。人の目をそばだたしめる離れ業のような技巧によりかかろうとすることもない。‘humanity’ の深い根を断ち切ることがない文学である。このことはイギリスには「個」が確立しているから、こういう文学を生み出すことになるのであろう。「個」が確立し、「自己実現」に向かって「自主性」をもって歩いていくから、あえて逆らうことがない。一見頑固なようではあるが、自分の「個」を確立するということは、他の「個」をも認めることであり、ここに「私」と「汝」との間の倫理的関係が成立していることになるのである。イギリス人はこうした生活を一番大切にする。Ifor Evans が *English Literature: British Life and Thought* (Longmans, 1944) で言うように、「イギリス小説は、トルストイが成し遂げたかの完全な生命像に到達したこともなければ、ドストエフスキーがものにした形而上学的な深さにまで掘り下げたこ

ともないことは、認めなければならない。しかしそれでも、イギリスは広い幅と多様性を有し」ているのである（高橋喜久夫訳『イギリス文学の魅力』 あぼろん社、1976, p.9）。しかしこのことはイギリス文学が、低次元の日常性の瑣末なことにのみかかずらっているということではない。イギリスはロマン派の運動の震源地となったところである。そこには豊かな想像力のはたらきが働いた。ワーズワスはロマン派の父と言われるが、彼は「ごく普通の、日常身近なものの中に驚異を発見したからである。」（ピーター・ミルワード 安西徹雄訳『イギリスのこころ』 三省堂、1979年, p.120）

イギリス人は「個」を大切にする。思想よりか人生を大切にする。そういうイギリス人は多様な文学作品を生み出すから、これらを体系づけて文学史にすることには非常な困難を覚える。われわれが英文学にアプローチする一番いい方法は、一つ一つの作品と正面から向かい合って理解しようとするのであろう。ここに「評論」という視座が浮上してくることになるであろう。しかし「個」の確立したイギリス人の書く作品を、すべての人間が同じようになじめるとは限らない。さきにも述べたように、文学批評は‘pleasure’から始まり‘wisdom’にまで達する行為だとすると、それぞれの作品に‘pleasure’を感じるそれぞれの人々が、それぞれの作品にアプローチを試みるのが、一番自然なことになるのであろう。本書においては、何人かの人々がそれぞれに‘pleasure’から‘wisdom’へと深まった自己の読書体験を「評論」として表現するという形式をとることになったのは、こういう意味あいがあるものと言えることであらう。

詩の部

第1章 『フォースタス博士の悲劇』

——アイロニーの世界——

1

おお、なんという利益と悦楽が、
 いや権力が、名誉が、全能が、
 この道に精進する者に約束されていることか。
 地球の静止している両極の間にあって動く一切は
 ことごとくおれの意のままになる。皇帝も、王者も、
 その威令が風靡しているのは要するにその領土内に限られており、
 風を呼び、雲を裂くなど思いもよるまい。
 だがこの術に長じた者の支配は
 人の心の及ぶ限り果てしなく拡がってゆく。
 魔術の達人はいわば神に近い。

(Act I, sc.i. 54—63)⁽¹⁾

ジョウフ
 「天上の神のように地上にあって、地水火風の四大元素の支配者になるのだ。」(Act I sc.i.77—78)との悪天使の巧みな誘惑の言葉によって、フォースタス(Faustus)はこの垂涎おく能わざる魔法を手に入れるため、24年間の期限を切って、彼の肉体と魂を悪魔ルーシファ(Lucifer)と、その使者メフィストフィリス(Mephistophilis)に与えたのであった。

劇の最初のこのように無限の権力、悦楽を求めて、地上における神の存在にまでなろうと欲したフォースタスは、最後の長い劫罰の懺悔で、人間よりも遙かにちっぽけな存在にでもいいからなりたいと願う。

フォースタスは墮地獄が眼前に迫った時、星に向かって、「深々とたちこめた霧を吸いあげるように、あの風雨をはらんだ雲の奥深く、今このおれを吸いあげてくれ。」(Act V, sc. ii.163—164)と頼む。星が大気に向かって息を吐き出す

時、「おれの四肢は濛々たるその口から飛び出し、ただおれの魂が天国に向かって昇ってゆけるように」と。さらに「獣という獣はみな幸福なのだ、なぜかといえば、あいつらが死んでゆくとき、その魂はたちまち四元素に融けさってゆくからだ。」(Act V, sc. ii. 180—182)とフォースタスの惨めな魂は慟哭する。かつて四大元素の支配者になろうとしたフォースタスは、今、最初は空気に、次には魂が彼の体から飛び出して、卑しい獣に変わることを願っているのである。

ついには、「おう、おれの魂よ、小さな水滴となつてしまえ、大洋の中に溶けこんでしまえ、そして見つからないようにするのだ！」(Act V, sc. ii. 189—190)と、彼はこの広い地上に身の置くところもなく、悪魔に二度と発見されないために、小さな水滴となつて、大海に落ち込みたいと願う。まさに悲鳴である。

当初、大きく天へ翔こうとした魂は、今や、小さくなれ、小さくなれとひたすら願う。劇の当初と最後に示される、この両極端の対照を見せるフォースタスの願望は、この劇のアイロニーの構造を余すところなく示している。『フォースタス博士の悲劇』(*The Tragical History of Doctor Faustus*, 1592)の開幕当初の「プロローグ」(Prologue)に説明役(Chorus)が登場して、たぐい稀れなる知力を奢って、自滅したフォースタス博士の運命の^{アリョウ}有様が語られる。その中で次のような台詞が述べられる。

ところが、やがてうぬぼれに災いされて知識を鼻にかけ、
蠟でつけた翼を駆ってみずからの分際をこえて天空へと翔けましたが、
その蠟も溶け、天意はついに彼の転落を断ずるにいたしました。

.....

魔術ほど彼には好ましいものはなく、
ただもう根本大事な祝福よりもそれに惑溺する体たらくでした。

(Prologue 20—27)

ウィッテンベルヒ大学の神学博士にまで登ったフォースタスは、「学問の輝ける賜物に食傷して」(Prologue 24)、「地球の静止している両極の間にあって動く一切はことごとくおれの意のままになる」(Act I, sc. i. 57—58)魔法に魅せられる。フォースタスは、スコラ哲学の世界観に基づく神の秩序と人間の秩序の限界を破ろうと試み、16世紀の表象本(emblem book)に親しいイカルス(Icarus)の比喩に従えば、⁽²⁾羽を蠟でつけた翼で天空まで飛翔し、あまりに太陽に近づきすぎたために、蠟が溶けて自滅した、エリザベス朝演劇の代表的な無神論者で

あったのである。言葉を換えれば、怖るべき、逆説的には偉大なる愚か者であったと言える。

ハリー・レヴィン (Harry Levin) はマーロウ (Christopher Marlowe) を「限度を越えて舞い上る人物」(an overreacher) に属し、彼自身イカルの争闘にとりつかれたタイプの人間であると性格づけし、イカルの見解は、必然的に悲劇の見解であると指摘しているが、『フォースタス博士の悲劇』は、最初の「プロローグ」で示されているように、このイカルス・コンプレックスというべき概念の枠内で描かれている。⁽⁴⁾

フォースタスはギリシャ神話のイカルのように、限度を越え高く舞い昇るが、やがて転落する哀しい宿命を背負っているのである。ルネサンス期において、イカルスはゴールディング (Golding) 訳の『メタモフォーシーズ』(Metamorphoses) によると、彼自身の浮調子な勇氣のために、父親の悪意ある技の犠牲者となった若者である。サー・J・デイヴィス (Sir J. Davis) は知識の悪用者として、イカルスをフィートン (Pheaton) と結びつけている。

「プロローグ」の上記引用の箇所は、フォースタスが当時の代表的無神論者であると同時に、「天国を魔術と混同し、至福の幸せを地獄へ突き落した愚かな主人公」である⁽⁵⁾ことを同時に語っているのである。自己の好むものに変わりうるという人間の願望、信念が魔法と結びつく。しかしながら、フォースタスは己が魂と引換えに得た魔術により、手に入るはずの全能が幻にすぎなかったことを、まだ彼の旅も始まらないうちに知るのである。神になるために得た魔法が玩具であったことを、彼は痛いほど味わう。フォースタスは明らかに騙されたのであった。彼が魂の代償に得たものは永遠につづく苦しみのみであった。絶望、後悔、改心へのはかなき希望の繰り返しがつづく。この劇では、こうした「損失の拷問」が中心テーマとして展開する。⁽⁶⁾『フォースタス博士の悲劇』は主人公の自己肯定と否定を繰り返しながら、自滅へたどる心の歴史を綴ったものであると言える。

『フォースタス博士の悲劇』の全篇を貫く皮肉の特徴について、それがイカルのイメージと結びついているということの他に、もう一つ留意しておく必要のある背景がある。フォースタスの生涯の皮肉は、セント・オーガスチン (St. Augustin) によって基礎を与えられた、キリスト教神学を背景にしていることを挙げておきたい。すなわち、オーガスチンの「大きくなると欲すれば欲する程、実際にはますます小さくなる。」(The greater it wishes to become, the less it becomes in fact.)⁽⁷⁾の教えに、この劇は裏付けされていると見てよい。セント・

オーガスチンの教えは、当時カトリック、プロテスタント両方によって、よく引用された。マーロウのケンブリッジ大学時代に神学教授であったピーター・バロウ (Peter Baro) はオーガスチンを「神学者達の王子」⁽⁸⁾と呼んで高い評価を払っている。マーロウはケンブリッジ大学の神学生として、当然オーガスチンの著作に親しんでいたに相違いない。『フォースタス博士の悲劇』は、ダグラス・コール (Douglas Cole) の指摘するように、「あらゆる混乱せる魂は、自らを罰する。」⁽⁹⁾ (Every disordered spirit shall be a punishmet to itself.) のオーガスチンの教えの線上にあると見てよい。

フォースタスは傲慢から知識を鼻にかけ、全世界を飛び、天と地の秘密を知りたいと願う。その結果罰せられ、大きくなろうと欲した魂は微少なものになるという皮肉な結末を迎える。エリザベス朝時代の罪についてのキリスト教神学観を背景におくと、フォースタスのこの傲慢がいかに罪深いものかよく理解できるのである。傲慢はすべての罪の始まりと当時考えられていた。⁽¹⁰⁾

「全ての罪の始まりは傲慢にある。そして人間の傲慢の始まりは神から逃避することにある。」という旧約聖書の中の章句と照らし合わせてみると、フォースタスの学問を鼻にかけての傲慢は最も基本的な罪であると言えよう。上記引用は旧約聖書経外典の一書 *Ecclesiasticus* から引出されたものであるが、この観念は神学徒のみならず、当時のすべてのキリスト教信者に、キリスト教の基礎原理として親しいものであった。エリザベス女王によって、英国中すべての英国民に日曜日に読むように指定された教訓 (homilies) の中の一つが次に挙げる章句であるのが、そのことを証明している。「賢人は言い給う。傲慢は神から離れゆく第一の始まりである。」⁽¹¹⁾

この劇の構造のアイロニーは上記のように、フォースタス=イカルスという概念の枠内で処理されたものであるが、マーロウはそれに加えて、当時の神学を裏付けに使ったのであった。フォースタスはその皮肉な生涯で数々の皮肉な誤りを犯すが、それはこうした神学概念内での主人公の道徳的盲目から生じたものである。すなわち、この劇のアイロニーは、罪と墮落の神学的概念に基づいていると言えよう。むしろ、当時のキリスト教神学概念でフォースタスを照射した時、この劇の世界はアイロニーに満ちあふれたものとなると言い換えた方がよいかも知れない。

人間の愚かしさの強調は中世道徳劇の伝統であるが、道徳劇の延長線上にある、この劇のアイロニーの中味は主人公の愚かしさに起因している。そしてそれは、中心に据えられたフォースタスの損失感から成り立っている。イカルス・